1　about　（トップページ　＞　about）

M-GTA研究会は、M-GTA（Modified-Grounded Theory Approach：修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）を用いて研究する研究者や実践家を支援する研究会です。M-GTAは、社会学者の木下康仁が、B・グレーザーとA・ストラウスによるオリジナル版GTAの方法論的課題を克服するために考案した質的研究の方法論で、本邦で広く活用されています。M-GTA研究会は2000年に発足し、2018年11月現在会員数は約600名です。会員は、大学院や学部の学生、大学教員、民間の研究者、専門職者などで、関心のある領域も医療、福祉、心理、教育、経営など多岐にわたります。M-GTA研究会では、会員の研究実践と交流を促進すべく、定例研究会を軸に様々な活動をしています。

2　活動概要　（研究会概要　＞　活動概要）

定例研究会

* 年3回、東京都内で開催。M-GTAを使って研究途中の会員による発表と、それに対するスーパーバイザーのスーパービジョンやフロアとの質疑応答。非会員は1回のみオブザーバーとして参加可能。

修士論文発表会

* 7月に東京都内で開催。中間発表（定例研究会的なもの）と成果発表（完成した修士論文に基づく発表とスーパービジョン）。非会員は1回のみオブザーバーとして参加可能。

合同研究会

* 2年に1回、各地方M-GTA研究会と合同で開催。2日間にわたる分析ワークショップ、基調講演、各地方M-GTA研究会の紹介、交流会（懇親会）。分析ワークショップは会員限定。有料。

ニューズレターの発行

* 定例研究会・修士論文発表会・合同研究会の開催後、定期的に発行（年4～5回）。会員限定。

スーパーバイザー養成講座

* 隔年開催、M-GTAを活用して研究する大学院生等を指導できる大学等の研究指導担当者の養成。会員限定。有料。

公開研究会

* 主に地方で不定期に開催。講演会および公開スーパービジョン。どなたでも参加可能。

出張ワークショップ

* 会員からの要望に応じて主に地方で開催。スーパーバイザーが派遣される。

出版助成

* M-GTAを用いた研究例の単行本化における出版費用の助成。審査あり。会員限定。（『M-GTAモノグラフシリーズ』を参照。）

4　会則　（研究会概要　＞　会則）

会則のテキスト＋PDFでの表示と、入会ページへのリンク

５　各地方のM-GTA研究会　（研究会概要　＞　各地のM-GTA）

各地方M-GTA研究会 リンクは出さず、団体名にリンクを貼ってください

・北海道M-GTA研究会 〔hokkaidomgta@gmail.com 〕

・中部M-GTA研究会 〔http://chubumgta.work/〕

・西日本M-GTA研究会 〔http://nmgta.org/〕

・中四国M-GTA研究会 〔https://m-gta2018.wixsite.com/m-gta2018〕

・九州M-GTA研究会 〔kyushumgta@gmail.com 〕

・沖縄M-GTA研究会 〔okmgta@gmail.com 〕

※当研究会と各地方研究会は別組織です。

各地方研究会の活動や入会方法、年会費については、それぞれの研究会にお問い合わせください。

６　M-GTAの概要　（M-GTAとは　＞　M-GTAの概要）

■M-GTAは、どのような意味でGTAの「修正版」なのでしょうか。

修正には一般に大小さまざまな程度や意味がありますが、ここでは技法面での修正ではなく、最も基本的な点である、なぜ修正「版」としているのかについて説明します。質的研究法としてのＭ-ＧＴＡの全体特性についてです。

　 次の小文は弘文堂のＭ-ＧＴＡシリーズのチラシ作成のために書いたものです。時間がない中でササッと書いたのですが、読み返してみてＭ-ＧＴＡの全体特性を理解しやすい内容になっていると思います。引用します。

　 データに密着した分析から独自の理論生成を可能とする質的研究法として 1960年代に提案されたグラウンデッド・セオリー・アプローチ（GTA）は、看護・保健、ソーシャルワーク、介護、教育、リハビリテーション、臨床心理などヒューマンサービス多領域を中心に広がり、また近年の質的研究法への世界的な関心の高まりの中で、その古典としての位置を占めるとともに、独自の曲折と展開をたどってきました。GTAとは何であるのか、と、GTAはいかに実践できるのか、を両軸にこれまで多くの議論と技法面の工夫が蓄積されてきています。

　 原石としてであれ、すべての可能性は最初の提案の中にあります。そして、その可能性を今日的状況の中で具体的な形にしていくことが課題となります。データを重視し理論の生成までを目的とする研究姿勢は、何のための理論かを問うことにもなります。研究者のためではなく、ヒューマンサービスの実践を支える作業仮説として必要との基本認識があります。研究結果の実践的活用は、GTAにあっては副次的目的ではなく一義的目的であります。そこから、研究者と実践者の新しい相互的関係の可能性が拓かれます。

　 当然、原石を磨く作業は、その過程で提唱者たちの限界を乗り越えていくことを意味します。数量的研究法に親和的なバーニー・グレーサーと意味の生成過程を重視するシンボリック相互作用論のアンセルム・ストラウスという対照的な研究スタイルの二人の社会学者が提唱したGTAは、いうなれば質的研究法一般を考える上で検討すべき主要な問題をほとんど網羅していることになります。GTAを論ずることは質的研究を論ずることでもあります。

　 本シリーズはオリジナルGTAの可能性を正面から受け止め、研究論、認識論、技法において独自に修正を行ない、より実践しやすいように改善した修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（M-GTA ： Modified Grounded Theory Approach ）の提示と、それを用いた研究例、モノグラフから構成されています。各モノグラフの内容自体が領域は違えど人間理解に向けてのすぐれたアプローチになっています。それぞれに著者である生きた人間＝研究者・実践者が中心にあり、方法や技法だけでなくM-GTAが強調する主要特性である【研究する人間】とは何であるのか、何をするのかを具体的にあらわしています。双方を突き合わせることで読者の中に一つの像が結ばれ、研究に向かう態勢が形成されると考えています。

　 さて、ここで強調したい点は、「原石としてであれ、すべての可能性は最初の提案の中にあります。そして、その可能性を今日的状況の中で具体的な形にしていくことが課題となります。」と「原石を磨く作業は、その過程で提唱者たちの限界を乗り越えていくことを意味します」です。原石とは言うまでもなく、未完のままに、あるいは、それ故に強烈なメッセージ力を持った、オリジナル版です。M-GTAは技法面で活用しやすく修正されただけでなく、原石の可能性を私なりに形にしたものと言えます。提唱者たちのその後の展開を範とするのではなく、あくまでオリジナル版にこだわり、彼ら二人の限界を越えることでその可能性を実現しようとしています。

　 したがって、修正版と言っても、ストラウス・コービン版とも、90年代初めの対立後に先鋭化しているグレーザー版とも、あるいは、最近のシャーマズの試みとも距離をおいたところにM-GTAは位置しています。

　 M-GTAは、切片化という技法を用いません。この技法はオリジナル版を含め、上記のすべてのGTAに共有されているので、この点をもってM-GTAはGTAではないという論点もありうるでしょう。しかし、それは表面的、形式的な見方で、原石であるオリジナル版の可能性の検討から生まれたという経緯からして、そして多くの主要な考え方を継承、発展させている点においても、M-GTAはGTAに起源をもつものであり、グレーザーとストラウスの独創性に敬意を表し、GTAの修正「版」と呼んでいます。別の名称にした方が混同を回避できるのでしょうが、そうしないのは以上の理由によります。

　 すでに拙著で論じてあるように、切片化とは技法にして方法論でもあり、認識論と不可分の関係にあります。この技法は素朴な客観主義に依拠しています。なお、シャーマズは技法としては継承しつつ、社会的構成（構築）主義の認識論を導入しているのですが、内部において不具合を起こしかねない不安定なものにみえます。

　 質的データの意味の解釈は研究者が一定の問題関心とテーマのもとに行なう作業であり、その適切さを客観主義に求めることは不可能です。では、その対極に位置する構築主義に足場を移し、意味の共同生成性とそのプロセスも含めた「理解」、自明性へのセンシティビティに比重を置けばよいでしょか。M-GTAはこの両者に対して批判的な独自の位置を求めます。換言すると、グレーザーの一貫した認識論的立場（客観主義）と、本来的にストラウスの立場であり近年より鮮明になってきた認識論的立場（構築主義）を、同時にいかに乗り越えられるかという課題です。質的研究は客観主義の限界を構築主義によって克服できるとは考えていません。この問題は、構図としてすでに原石、オリジナル版から読み取れるのですが、同時に、現在、質的研究を論ずる上でもっとも重要な問題のひとつでもあります。

　 客観主義に基づく研究は一般化可能な知識の生成を目指します。一方、構築主義は知識とはそもそも非一般化可能なものであるとし、言わば微分的にローカル化していくところで成立する知識を対象にします。構築主義の重要性は言を待たないのですが、閉じた知識となる点に難があります。この両者に対して、M-GTAは、限定された範囲内において一般化し得る知識（グラウンデッド・セオリー）の生成を目的とするのですが、この限定的一般化は分析の結果提示される知識だけで可能となるのではなく、【研究する人間】が【分析焦点者】を介して実践するという条件設定と、応用者が【分析焦点者】の視点を介してそれを現実場面において実践活用するという条件設定の組み合わせによって成立する。ここが重要なポイントです。客観主義と構築主義をどちらも排除することなく、むろんいずれか一方にくみするのではなく、両者を統合する枠組みをこのように設定しているのです。

　 M-GTAがなぜ実践、とりわけヒューマンサービス領域における実践を強調しているのかを理解すればM-GTAの戦略性が見えてくるでしょう。社会的活動としての研究が果たすべき役割（研究結果の実践的活用）という課題が一方にあり、他方では、分極化へと加速する知識のあり様を克服する研究的立場と方法の模索が時代の課題となっているのであり、これらは実はヒューマンサービス領域において一体のものと課題設定できるのです。そこにM-GTAの可能性をおいています。

（担当・木下康仁、2009年HP開設時）

■M－GTAでは、分析テーマと分析焦点者の2点からデータをみていくとされていますが、なぜそこまで絞れるのでしょうか。また、どのように「みていく」のでしょうか。

どのような質的研究法であっても、データあるいは調査記録を何らかの方法で扱っているものです。その「方法」をコーディングと総称できるのですが、数量的研究法の用語に限定する立場や研究調査の政治性 ( 権力性 ) を重視する立場からはそれぞれの理由からコーディングと呼ぶことには異論があるかもしれません。この問題も「…とは何であるのか」と「…はいかに実践するのか」という基本的な視点に分けて考えると効果的です。この視点は以前 GTA のわかりにくさを解決するために導入したのですが、他の質的研究法の理解にも使えます。…の部分には個別の研究法を入れればよいのです。例えば、「エスノメソドロジーとは何であるのか」と「エスノメソドロジーはいかに実践するのか」、あるいは「ライフストーリーとは何であるのか」と「ライフストーリーはいかに実践するのか」、あるいは同様に「ナラティブアプローチとは何であるのか」と「ナラティブアプローチはいかに実践するのか」等々。比重や明示性はさまざまでも、どれも「方法」をもっています。データや調査記録のある部分に着目したり抜き出したりすることが行われているのは、解釈のための基本的な作業だからです。質的研究は「方法」に関して従来多くの労力をかけてこなかったのですが、その明確化に向けて近年多くの論考がみられるようになりました。ただ、「…とは何であるのか」と「…はいかに実践するのか」のバランス具合い、統合度に注意をはらい個々の質的研究法について批判的に理解することが大事です。学習者は手っ取り早く身につけようとして「方法」に関心を集中しがちですが、それだけでは不十分です。

　 さて、 GTA の場合、「何であるのか」は当初から明快でした。そこに大きな期待と支持が寄せられたのですが、その一方で、 「いかに実践するのか」つまり、その方法はわかりにくいものでした。このあたりのことはすでに説明してありますので省略しますが、その要点がデータの切片化にあるのは理解できました。わかりにくさは切片化という技法だけではなく、それを根拠づける考え方にありました（「グレーザー的呪縛」の問題です）。ちょっとくどくなりますが、「切片化とは何であるのか」と「切片化はいかに実践するのか」のそれぞれと両者の関係のあいまいさです。当初からあったグレーザーとストラウスの微妙なバランスです。質的研究の一般的なコーディング法と技法としての切片化の関係というよりも、問題は GTA における切片化の位置づけです。

　 いろいろと検討したのですが、結果的に、 GTA の可能性は切片化という技法に依拠するのでは十分達成できないのではないか、むしろ逆に研究法として矮小化する方向になるのではないかと考えるようになりました。端的に言えば、「何を、どのように」 (how) を考えていくと、別の視点、「誰が、何のために」 (by whom) がそれ以上の重要性をもって浮上してきたのです。前者を実際に行うのは後者だからです。後者を論ぜずして前者だけを語ることはできない。これは GTA や質的研究法に限られることではなくむしろ研究一般に言えることで、研究者はえてして自分自身を問わない傾向があります。数量的、質的を問わず専門的研究者にあっては与件化しやすく、また、大学院生も研究することが差し迫った課題のためこの部分を飛ばしてしまいやすい。それでいて質的データの意味の解釈をしようとする。しかも、そこに切片化という技法が客観性を担保するという位置づけのもとに導入されてくるのは教育的でもないし、研究自体に危うさを感じさせます。

　 そこから、データの切片化はしないということと【研究する人間】の視点（誰が、何のために、社会的活動としての研究を行うのか）の導入が不可分のものとして M-GTA を構成していきます。【研究する人間】として、自分自身をまず対象化すること、自分の問題関心をできるだけ自覚化することを重要な要件としたわけです。これはどのような研究であれ当然要請されることであると同時に、質的データの解釈に際しては特に有効な方法となります。研究を行う自分自身を抽象的な存在とせず、意義と目的を踏まえた具体的な問いを立て、それに向かう存在として自分の立ち位置を確認できるからです。客観性の要件に応えようとせずとも、恣意的な解釈にならない、独自の方法を考案することは、オリジナル版で提示された考え方を活用、再編すれば十分可能です。 M － GTA はその一つの形です。

　【研究する人間】の視点は、研究上のカウンターパートとして【分析焦点者】というもう一つの人間像とセットになります。【分析焦点者】とは一定の条件設定で定義される集合的他者で、面接対象者の選定の基準になり、データの解釈の際に経由する視点となり、分析結果の一般化可能な範囲を規定するものとなります。 M-GTA では分析上の位置づけだけでなく、研究法としての位置づけにも関係して、インターラクティブ性３位相の中で説明してあります（『ライブ講義 M-GTA 』，弘文堂， 2007 年， 88 － 99 頁）。

　 では、切片化しないとすれば、データをどのように扱えばよいのかという問題が生じます。分析者の先入観が入らないように、データを細かく分けてそれぞれについて意味を考える切片化という方法は、データの意味を考える前に、細かく分けることから始まります。非常に煩雑な作業になりますが、論理的にはできるだけ細かく分ける作業から始める必要があります。

　 その方法を取らないとすれば、工夫が必要になります。データとの最初の接点をどうするのか。ただ、これはむずかしいことではなく、【研究する人間】の視点にたてばむしろ常識的に考え付くものです。それが、 M-GTA で用語化している分析テーマの設定です。これまで機会あるごとに強調してきているように、分析テーマの設定は分析の成否にかかわる非常に重要な点です。自分の問題関心を「問い（ research question ）」の形にしたもので、かつ、データに即してみていけるように、データの具体的で多様な内容を検討していけるようにバランス設定されたものです。簡単そうに見えて実際には簡単なことではなく、分析テーマは思いつきで得られるというよりも時間をかけて練り上げていくものです。その過程で、指導や助言が大切になります。そして、分析焦点者と合わせて分析テーマとの関連でデータをみていき、関連する箇所に着目して分析ワークシートによる概念生成を進めていきます。データに対して「着目」という選択判断をするためにはそれを導く視点が必要で、 M-GTA は分析テーマと分析焦点者を用います。切片化は逆に、方法論としてこの選択判断を迂回し、まず細分化し、その部分の意味を検討することから出発します。したがって、最初ほどこの作業は細かい必要があり、その後は比較検討から切片化するデータ部分は選択判断の対象となります。方法にして方法論でもあると言う所以です。継続的比較を行う時に最初の比較材料をどのようにして得るかという問題ですが、データの文脈性を重視するかどうか、調査分析を行う人間に思考、判断、選択についてどこまで自覚化、意識化を求めるか、が両者の主要な相違点になります。 だから、一見似たようなことをしているようにみえても、似て非なるという言い方があるように、作業の表面的な類似性（その限りでは、どの質的研究法も何らかの「方法」をもっている）と作業の意味と目的とは異なります。

　 要するに、データとの最初の分析的接点にこだわればよいのです。データを前にして、あなたは何を考えどうするのか、それはなぜかを想像すればよいでしょう。

　 M-GTA では分析テーマと分析焦点者の 2 点からデータをみていきます。意味合いとしては、目一杯集中してこの 2 点だけからみていく、ということです。その方が実際にはより柔軟な対応ができます。逆のように思われるかもしれませんが、選択判断は比較で行うので比較基準を明確化しておけば修正の判断もしやすいからです。

　 データはディテールが豊富なためこの 2 点を意識していても、内容に触発されてさまざまなアイデアが浮かびますが、それらはこまめに「理論的メモノート」に記録しておき、まずはこの 2 点に集中してみていきます。それで大丈夫なのは、 2 点にまで絞るからと言って、一度決めたら絶対変えないという硬直したものではないからです。分析テーマはデータ収集に入る前に考え、そして、データ収集後にデータの内容全体を踏まえて再検討し、さらにデータの分析に入ってからも必要に応じて調整していきます。初期段階の分析作業は実は分析テーマの確定でもあることが珍しくないものです。分析テーマと分析焦点者によってデータをふるいにかけるのではなく、データの具体的多様性にオープンになるよう必要な場合には分析テーマを変えるという調整方法をとります。

　 分析テーマが安定するまでにていねいな検討が必要になるのとは対照的に、【分析焦点者】の設定で迷うことはまずありません。分析テーマとの関係で焦点を広げるか絞るか、つまり、条件を追加し対象者範囲を広げるか、条件を減らして狭めるかの調整になります。

　 分析テーマと分析焦点者についてこうした調整をすると、二つ目の論文につながるもう一つの分析テーマが設定できる場合もあります。

　 分析テーマに「～のプロセスに関する研究」式にプロセスという言葉をあえて入れるのは、最終的に動態的プロセスをとらえようとしているからです。ワークシートで概念生成をする時には、その概念が、明らかになるであろうプロセスのどこに、どのように関係しそうかを常に意識していきます。分析結果がすぐに出てきそうな場合はまだ分析テーマが練られていないと考え、再検討します。自分の研究のオリジナリティは結果で具体的になるのですが、実は分析テーマの設定と深く関係しています。大変そうに思えるでしょうが、重要であるほどそういうもので簡単に、楽には通過できないものです。どの研究法でも難所はいくつかあります。しかし、越える道筋も用意されているはずで、 M － GTA では分析テーマをていねいに検討すればするほど、データをみていくときにオープンな姿勢をとることができます。データの多様な部分に気づけるようになるからです。分析テーマの設定過程でいろいろな点から検討を加えているので、自分の中にたくさんのアンテナを用意できているからで、データの内容的豊富さにセンシティブになれます。データに対するオープンな姿勢とは単なる心構えではなく、こうした検討作業を通して経験的に身につけていくものです。

（担当・木下康仁、2009年HP開設時）

８　M-GTA関連書籍　（M-GTAとは　＞　M-GTAに関する書籍）

①必読文献

* 木下康仁、グラウンデッド・セオリー・アプローチ-質的実証研究の再生、弘文堂、1999
* 木下康仁、グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践-質的研究への誘い、弘文堂、2003
* 木下康仁編、分野別実践編グラウンデッド・セオリー・アプローチ、弘文堂、2005
* 木下康仁、ライブ講義M-GTA-実践的質的研究法 修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチのすべて、弘文堂、2007
* 木下康仁、質的研究と記述の厚み-M-GTA・事例・エスノグラフィー、弘文堂、2009
* 木下康仁、グラウンデッド・セオリー論（現代社会学ライブラリー17）、弘文堂、2014

②モノグラフシリーズ

* 小嶋章吾、M-GTAによる生活場面面接研究の応用〜実践・研究・教育をつなぐ理論〜、ハーベスト社、2015
* 木下康仁編、ケアラー支援の実践モデル、ハーベスト社、2015
* 根本愛子、日本語学習動機とポップカルチャー〜カタールの日本語学習者を事例として〜、ハーベスト社、2016
* 畑中大路、学校組織におけるミドル･アップダウン・マネジメントミドル･アップダウン・マネジメント：アイデアはいかにして生み出されるか、ハーベスト社、2018

9　例年の年間スケジュール　（研究会の活動　＞　年間スケジュール）

本研究会では会員の様々な研究面の需要に応えるため、毎年以下の研究活動を行っています。

年次総会：５月

定例研究会：　5月(年次総会と同時開催）、10月、2月

修士論文発表会：　7月

会員限定シンポジウム：不定期

公開研究会：　不定期

合同研究会（分析ワークショップ）：隔年開催

出張ワークショップ：不定期

スーパーバイザー養成講座：4月～

ニューズレターの発行：定期（定例研究会・修士論文発表会・合同研究会の開催後）

10~15　各研究会活動　（研究会の活動　＞　各研究会ページ）

■定例発表会

研究会の活動の中心が定例研究会です。

東京の研究会では、年３回のペースで、東京都内で開催しています。内容は、希望した会員による研究発表で、発表者とスーパーバイザーおよびフロアとの間で、活発なやりとりがあります。

＋

過去開催履歴

■修士論文発表会

過去開催履歴

■会員限定シンポジウム

年1回のペースで、M-GTA研究会および各地方M-GTA研究会の会員限定でシンポジウムを開催しています。

過去開催履歴

■公開研究会

公開研究会は、M-GTAの方法論に関する講演と、具体的な研究例に基づく公開スーパービジョンで構成され、主に地方で不定期に開催されます。

＋

過去開催履歴

■合同研究会

合同研究会は、2年に1度、全国の各地方M-GTA研究会の会員が一堂に集まり、講演、分析ワークショップ（会員限定）、研究会紹介、交流会などを通して、M-GTAに関する学びと親交を深める目的で開催されます。

＋

過去開催履歴

■SV養成講座

SV養成講座は、会員対象の有料講座で、質的研究の大学院前期課程（修士論文レベル）での指導やスーパーバイズ（SV）をする予定の方のために実施しています。M-GTAの講義方法、M-GTAを用いた論文指導やSVの実践方法を９月～１２月にかけて、1泊２日の研修合宿、研究会での演習と最後のふりかえり講義を行います。

受講するための資格要件があります。修了者には講座担当者の審査を経て修了証を発行します。

毎年、７月ころに募集を開始します。講座の日程や詳しい内容、受講要件については募集要項に掲載します。

■その他の活動

・出張ワークショップ

出張ワークショップは、地方の会員が東京での研究会に参加する負担を軽減するために、少人数の会員および若干の非会員の参加でグループを地元で作り、M-GTAの学習会を企画し提案した場合、世話人会の検討を経て東京の世話人/スーパーバイザーが出張する事業です。予算化と総会での承認が必要ですので、実施は通常翌年となります。問い合わせはメールで事務局まで。

16　博士論文　（会員による研究の紹介　＞　博士論文）

既存サイトの論文を公開先へのリンク付きで掲載

17　書籍　（会員による研究の紹介　＞　書籍）

* 得津愼子、家族主体ソーシャルワーク論ー家族レリジエンス概念を手がかりに ナカニシヤ出版 2018
* 中村聡美、うつ病休職者の集団認知行動療法に関する混合型研究 風間書房 2018
* 佐川佳南枝、記憶と感情のエスノグラフィー ハーベスト社 2017
* 鈴木京子、教員の異文化体験―異文化適応・人間的成長・教員としての成長― 風間書房2015
* 岩本　操、ソーシャルワーカーの「役割形成」プロセス－「違和感のある仕事」から組織活動への実践モデル－ 中央法規 2015
* 大賀　有記、ソーシャルワーク支援の発展的二重螺旋構造―役割喪失にともなう悲嘆作業過程の分析― 相川書房 2014
* 赤畑　淳、聴覚障害と精神障害をあわせもつ人の支援とコミュニケーション－困難性から理解へ帰結する概念モデルの構築― ミネルヴァ書房 2014
* 保正　友子、医療ソーシャルワーカーの成長への道のり～実践能力変容過程に関する質的研究　相川書房 2013
* 久松　信夫、認知症高齢者ソーシャルワーク－ソーシャルワーカーの困難性と対処行為　相川書房2013
* 川先　俊子、韓国における日本語教育必要論の史的展開 ひつじ書房 2013
* 黒岩　晴子、被爆者を援助しつづける医療ソーシャルワーカーたち 本の泉社 2012
* 松戸　宏予、日英のフィールド調査から考える ：学校図書館における特別支援教育のあり方 ミネルヴァ書房 2012
* 浅野　正嗣（編）、ソーシャルワーク・スーパービジョン実践入門－職場外スーパービジョンの取り組みから－ （株）みらい 2011
* 林　葉子、夫婦間介護における適応過程 日本評論社 2010
* 山井　理恵、利用力/提供力を促進するケアマネジメント-支援困難なクライエントに対する実践活動の質的研究- 相川書房 2010
* 三輪　久美子、小児がんで子どもを亡くした親の悲嘆とケア-絆の再構築プロセスとソーシャルワーク- 生活書院 2010
* 長崎　和則、精神障害者へのソーシャルサポートの活用-当事者の「語り」からの分析- ミネルヴァ書房 2010
* 山野　則子、子ども虐待を防ぐ市町村ネットワークとソーシャルワーク-グラウンデッド・セオリー・アプローチによるマネージメント実践理論の構築- 明石書店 2009
* 標　美奈子、健康マイノリティの発見 弘文堂 2008
* 横山　登志子、ソーシャルワーク感覚 弘文堂 2008
* 小倉　啓子、ケア現場における心理臨床の質的研究－高齢者介護施設利用者の生活適応プロセス 弘文堂 2007
* 三毛　美予子、生活再生に向けての支援と支援インフラ開発－グラウンデッド・ セオリー・アプローチに基づく大学病院のソーシャルワーカーによる退院援助モデル化の試み－ 相川書房 2003

18　入会・お問い合わせ　（入会・お問い合わせトップ）

■入会のご案内

M-GTA研究会は、質的研究の方法論である修正版グラウンデッド･セオリー･アプローチ（Modified Grounded Theory Approach：略してM-GTA）の理論と方法を学び、研究結果の実践的活用を促進することを目的とした学術的研究会です。

会員になると、以下のことができるようになります。

1)M-GTA研究会が開催する定例研究会や修士論文発表会などの発表への応募

2)M-GTA研究会が開催する定例研究会や修士論文発表会などへの参加

3)M-GTA研究会ウェブサイト内会員専用ページへのアクセス

4)M-GTA研究会が発行するニューズレターの閲覧

5)その他、M-GTA研究会が開催する会員限定の催しへの参加 など

入会をご希望の方は、M-GTA研究会会則をご確認のうえ、下記お手続きをお願いいたします。

1．入会手続き

1)こちら入会申込フォームにて入会者の基本情報をご登録ください。

\*入会申込フォームを送信と同時に、M-GTA研究会会則に同意したものとみなします。

2)年会費6000円をお振込みください。

\*振込口座情報は、入会申込フォームの自動返信メールに記載されています。

自動返信フォームが届かない場合は、事務局( )までご連絡ください。

2．入会後について

1) 入会者の基本情報および年会費のお振込みが確認できましたら、以下2点お知らせいたします。

①研究会ウェブサイト内会員専用ページへのログイン方法をご案内

②研究会会員連絡用メーリングリストへのご登録

\*年会費お振込み後、10日以上たってもお知らせが届かない場合は、事務局( )にご連絡ください。

2) 積極的に研究会活動に参加してください。

■その他お問い合わせ

研究会へのお問い合わせは M-GTA研究会事務局 [office@m-gta.jp](mailto:office@m-gta.jp)まで

19　入会フォーム　（入会・お問い合わせトップ　＞　入会フォーム）

（既存サイトのもの）

入会登録情報

以下の項目にご入力の上、画面下部の「確認画面に進む」ボタンをクリックしてください。

お名前

フリガナ

所属

メールアドレス

郵送希望先　自宅／所属先

研究会からのお知らせがあった際の郵送希望先を選択してください

郵送希望先郵便番号

郵送希望先住所1

郵送希望先住所2（所属機関・部署名／建物名・部屋番号）

電話番号

20　よくある質問　（入会・お問い合わせ　＞　よくある質問）

|  |  |
| --- | --- |
| よくある質問 | 返答 |
| 年間のスケジュールについて教えてください。 | 研究会の年間のスケジュールはこちら(リンクを貼る)に掲載してあります。開催時期はあくまで目安となりますので、詳細は必ず「お知らせ(リンクを貼る)」にてご確認ください。 |
| 定例研究会等で発表したいのですが、どのようにすればよいですか。 | 当研究会の会員は、定例研究会、修士論文発表会にて発表が可能です。申込方法は会員専用ページ(リンクを貼る)、会員メーリングリストにてご案内いたしますので、ご確認ください。発表要項については常時、会員専用ページ(リンクを貼る)に掲載されていますので、ご参考になさってください。 |
| 定例研究会への参加登録方法を教えてください。 | 定例研究会などの参加登録は、会員向けには、おおよそ開催日の1か月前より会員専用HP(リンクを貼る)および会員メーリングリストにてご案内を開始します。非会員向けには、おおよそ開催日の一週間前より「お知らせ」(リンクを貼る)でご案内を開始いたします。それぞれご確認ください。 |
| 定例研究会の参加登録の締切を過ぎてしまったのですが、参加できますか。 | 会場や配布物の手配がありますので、締切を過ぎた場合は、事務局にご相談ください。 各種研究会のお申し込みは、参加登録期間中にHP上の申込フォームからお願いしています。締切を過ぎると、申込フォームにアクセスできなくなります。各種お申し込みは時間に余裕を持って行ってください。 |
| 定例研究会に参加登録をしたのですが、都合により参加できなくなりました。 | 会場、配布物の準備の都合がありますので、参加できないことがわかりましたら、事務局までご一報ください。 |
| 非会員ですが、定例研究会に参加できますか。 | 非会員の方も、参加費(2000円)をお支払いいただくことで、1回に限り参加できます。定例研究会の一週間前を目途に非会員向けのご案内を「お知らせ(リンクを貼る)」にて開始いたしますので、ご確認ください。 |
| 他の地方M-GTA研究会の会員ですが、定例研究会に参加できますか。 | 各地方M-GTA研究会の会員の方は、非会員ではなく、当研究会の会員同様の手続きで参加登録ができます。各地方研究会事務局にご案内をしておりますので、ご所属の地方M-GTA研究会(リンクを貼る)にお問い合わせください。 |
| 他の地方M-GTA研究会の会員ですが、定例研究会で発表できますか。 | 当研究会で発表できるのは、当研究会の会員のみです。 |
| スーパーバイザーの先生を紹介してもらえますか。 | 当研究会では、会員非会員に関わらず、スーパーバイザーの個別の紹介は行っておりません。ですが、定例研究会で発表することで、スーパーバイザーを始め、参加者からの助言が得られます。発表へのご応募についてはこちら(リンクを貼る)にてご確認ください。 |
| 年会費を払いたいのですが、振込先の口座番号が分かりません。 | 事務局までお問い合わせください。 |
| 年会費を払ったかどうかわからないのですが、どうすればいいですか。 | 年会費に関しましては、事務局から振込確認のメール等はいたしておりません。事務局宛にメールを頂ければ、払込状況を確認しまして返信いたします。二重に支払うことを防ぐためにも、ご自身の払込状況が分からなくなった場合は、事務局までお問い合わせください。 |
| 年会費の振込用紙が届きません。 | 当研究会では、原則として紙媒体の振込用紙を発行しておりません。郵便局にある払込取扱票に、当研究会口座番号、氏名、住所、払込に関する内容などをご記入のうえ、お振込みください。インターネットバンキングによるお振込みも可能です。振込先がわからない場合は、事務局までお問い合わせください。 |
| 年会費の会期はいつからいつまででしょうか。 | 当研究会の会期は、4月1日から3月31日です。例えば、2018年度の会期は2018年4月1日から2019年3月31日、となります。 |
| メーリングリストからのメール、自動返信メールが届きません。 | 迷惑メールフォルダに振り分けられている、受信を拒否されている、などが考えられますので、ご自身の受信状況をまずはご確認ください。受信状況に問題がない場合は、事務局までご相談ください。 |
| 会員専用ページにアクセスできません。 | 会員専用ページは、セキュリティの向上のため、定期的にパスワードを変更しています。最新のパスワードでログインしてください。パスワードがわからない場合は、事務局までお問い合わせください。 |
| 自分がどの地域の研究会に所属しているのかが分かりません。 | 当研究会と各地方M-GTA研究会は、それぞれ別の組織です。当研究会で入会手続きをした方は、すべて当研究会の所属となります。各地方M-GTA研究会に所属しているかどうかは、それぞれの研究会(リンクを貼る)にお問い合わせください。 |
| 他の地方M-GTA研究会ではどのような活動をしていますか。 | 各地方M-GTA研究会の活動については、それぞれの研究会(リンクを貼る)にお問い合わせください。 |

21　定例研究会発表要項　（会員専用ページ　＞　定例研究会発表要項）

**M-GTA 研究会 定例研究会 発表要綱**

2018年10月 1日改定

1. **発表応募にあたって**

* 下記「4. レジュメ項目」の各項目に沿って、レジュメをご用意下さい。その他、分析ワークシートや結果図など、必要な資料を適宜追加して下さい。
* 発表時間は、発表者数によって若干の変更はありますが、30 分～40 分程度で発表して頂き、その後の質疑応答の時間を含めた全体の持ち時間は、概ね１時間 20 分です。

1. **レジュメ等について**

* ご持参頂くレジュメと資料の部数は、ご発表予定日の１週間程度前に、おおよその参加予定者数をお知らせ致します。
* なお、発表後に回収を希望される配布物につきましては「回収」と明記し、ご発表時に司会者にお申し出下さい。

1. **研究会終了後**

* 2 週間以内に、ニューズレターの原稿を以下アドレスにご提出下さい。

m-gta@accelight.co.jp（M-GTA研究会事務局）

1. **レジュメ項目**

|  |
| --- |
| タイトル、氏名、所属、研究目的（修論・博論・それ以外）。タイトル、氏名、所属は英語でも表記。 |
| １．研究テーマ |
| ２．M-GTAに適した研究であるかどうか |
| ３．分析テーマへの絞込み |
| ４．インタビューガイド |
| ５．データの収集法と範囲 |
| ６．分析焦点者の設定 |
| ７．分析ワークシート：ひとつの概念生成例を挙げる  ＊命名、定義、ヴァリエーション、反対例の検討を含めた理論的メモの全て |
| ８．カテゴリー生成：概念の比較をどのように進めたかを具体例をあげて説明する |
| ９．結果図：図の提示だけでなく、どのように図を作成していったのかも説明する。 |
| 10．ストーリーライン |
| 【以下の 2 点は、可能な範囲でお願いします。ご自分の振り返りにもなります。】 |
| 11．理論的メモ・ノートをどのようにつけたか、また、いつ、どのような着想、解釈的アイデアを得たか。現象特性をどのように考えたか。 |
| 12．分析を振り返って、M－GTA に関して理解できた点、よく理解できない点、疑問点などを簡潔にまとめてください（できるだけ箇条書きに） |
| 文献リスト：先行研究とともに、方法論および研究例として参考にした文献を明記して下さい。 |

**M-GTA研究会　第　回定例研究会　応募要領**

2018年10月 1日改定

所属：

氏名：

連絡先（メールアドレス）：

1. 題目（テーマ）：
2. 希望理由（目安　100～200字）：
3. 現在の進捗状況（目安　100字程度）：
4. 研究会参加回数：

定例　回（ 年 月）

修論　回（ 年 月）

合同　回（ 年 月）

その他（　　）

1. 方法論および研究例として参考にした文献（主なもの）：

22　修士論文発表会発表要項　（会員専用ページ　＞　修士論文発表会要項）

**M-GTA 研究会 修士論文発表会 発表要項**

＜成果発表＞ 持ち時間（スーパーバイザーやフロアとの質疑応答・議論を含む）：80 分

成果発表（修了者による発表）で報告すべきポイント

① 問題意識の芽生え

② 専門分野の先行研究との重なりと差異（問題意識の明確化）

③ 方法論（M-GTA）決定の契機（問題意識の明確化）

④ 分析テーマの設定

⑤ 分析焦点者（or 分析ポイント）の設定

⑥ データ範囲の方法論的限定

⑦ 現象特性の検討

⑧ 対象者へのアクセスとデータ収集の展開

⑨ 初期の分析ワークシート作成とバリエーションの選択

⑩ 分析テーマの修正／データ範囲の確認

⑪ オープン化における困難・工夫

⑫ 現象特性の再検討

⑬ 収束化への移行

⑭ 結果図の作成（収束化における困難・工夫）

⑮ ストーリーラインの作成と結果図の修正（収束化における困難・工夫）

⑯ 今後の研究の発展

＋

★指導教員による研究指導の回数と時期

★研究計画書提出・発表の義務の有無

★ゼミ発表や中間発表の回数と時期

★研究会や勉強会での発表の回数と時期

★外部指導教員の活用の有無（ある場合は回数・時期）

★執筆開始の時期（目次、序論、方法、結果、考察、結論、文献リスト等）

※題目最終決定の時期

＜中間発表＞ 持ち時間（スーパーバイザーやフロアとの質疑応答・議論を含む）：70 分

中間発表で報告すべきポイント

① 問題意識の芽生え

② 専門分野の先行研究との重なりと差異（問題意識の明確化）

③研究テーマ（分析テーマではない！）

④なぜ M-GTA を活用し、他の方法論を活用しなかったのか

⑤ 分析テーマ

⑥分析焦点者

⑦データの収集方法と範囲（方法論的限定）

⑧3つのインタラクティブ性のうち、1 つ目と 3 つ目に関する具体的内容と考え

⑨現象特性

⑩結果図とストーリーライン（現段階での）

⑪分析ワークシート例（もっとも自分がアピールしたい１概念のみ）

⑫カテゴリー（もっともアピールしたい１カテゴリーのみ。どんな概念間関係の検討をしたかを提示）

⑬分析をふりかえって（疑問点など）

＋

＜以下★項目それぞれの予定または進捗状況を提示＞

★指導教員による研究指導の回数と時期

★研究計画書提出・発表の義務の有無

★ゼミ発表や中間発表の回数と時期

★研究会や勉強会での発表の回数と時期

★外部指導教員の活用の有無（ある場合は回数・時期）

★執筆開始の時期（目次、序論、方法、結果、考察、結論、文献リスト等

M-GTA研究会 第〇回修士論文発表会　発表申込書

発表希望区分（該当に○）：[　成果発表　　中間発表 ( M1 M2 )1　]

氏名：　　　　　　　　　所属：　　　大学大学院　　　　研究科　　　専攻　　　分野2

発表題目：

研究目的：

研究背景①社会的意義：

研究背景②学術的意義：

分析テーマ：

分析焦点者：

分析対象者：

データ収集法（該当に○）：[　個人ｲﾝﾀﾋﾞｭｰ　ｸﾞﾙｰﾌﾟｲﾝﾀﾋﾞｭｰ　その他（　　　　　　　　）]

分析対象者総数：　　人（収集：予定　　人中　　人終了／分析：　　人中　　人分析中）

分析ﾜｰｸｼｰﾄ（1例のみ。これも含めて全体を2頁以内に収めること。）：

結果図：

ｽﾄｰﾘｰﾗｲﾝ：

発表希望理由：

1中間発表希望者は学年を選択してください。M3以上は余白にその旨記載してください。

2成果発表希望者は、学位を取得した時の所属先と現在の所属先の両方を記載してください。

23　ニューズレター　（会員専用ページ　＞　ニューズレター）

M-GTA研究会では定例研究会・修士論文発表会・合同研究会の開催後にニューズレターを発行しております。

|  |  |
| --- | --- |
|  | 発行日 |
| 第01号 | 2003-12-03 |
| 第02号 | 2004-02-01 |
| 第03号 | 2004-03-18 |
| 第04号 | 2004-06-06 |
| 第05号 | 2004-08-07 |
| 第06号 | 2004-09-20 |
| 第07号 | 2004-12-22 |
| 第08号 | 2005-03-19 |
| 第09号 | 2005-06-10 |
| 第10号 | 2005-08-07 |
| 第11号 | 2005-11-22 |
| 第12号 | 2006-02-05 |
| 第13号 | 2006-06-07 |
| 第14号 | 2006-08-10 |
| 第15号 | 2006-12-23 |
| 第16号 | 2006-11-08 |
| 第17号 | 2007-03-27 |
| 第18号 | 2007-06-18 |
| 第19号 | 2007-07-31 |
| 第20号 | 2007-08-30 |
| 第21号 | 2007-09-29 |
| 第22号 | 2007-10-31 |
| 第23号 | 2007-11-30 |
| 第24号 | 2007-12-30 |
| 第25号 | 2008-01-31 |
| 第26号 | 2008-03-03 |
| 第27号 | 2008-03-31 |
| 第28号 | 2008-05-08 |
| 第29号 | 2008-06-18 |
| 第30号 | 2008-08-19 |
| 第31号 | 2008-09-30 |
| 第32号 | 2008-11-07 |
| 第33号 | 2008-12-31 |
| 第34号 | 2009-01-31 |
| 第35号 | 2009-02-28 |
| 第36号 | 2009-03-30 |
| 第37号 | 2009-05-01 |
| 第38号 | 2009-06-09 |
| 第39号 | 2009-06-22 |
| 第40号 | 2009-08-10 |
| 第41号 | 2009-09-13 |
| 第42号 | 2009-10-10 |
| 第43号 | 2009-11-30 |
| 第44号 | 2009-12-31 |
| 第45号 | 2010-03-03 |
| 第46号 | 2010-04-25 |
| 第47号 | 2010-06-17 |
| 第48号 | 2010-08-26 |
| 第49号 | 2010-10-05 |
| 第50号 | 2010-11-06 |
| 第51号 | 2011-01-10 |
| 第52号 | 2011-02-13 |
| 第53号 | 2011-04-12 |
| 第54号 | 2011-05-20 |
| 第55号 | 2011-07-24 |
| 第56号 | 2011-10-21 |
| 第57号 | 2011-11-05 |
| 第58号 | 2011-12-03 |
| 第59号 | 2012-01-20 |
| 第60号 | 2012-04-10 |
| 第61号 | 2012-07-02 |
| 第62号 | 2012-08-06 |
| 第63号 | 2012-09-27 |
| 第64号 | 2013-01-06 |
| 第65号 | 2013-03-30 |
| 第66号 | 2013-06-22 |
| 第67号 | 2013-08-10 |
| 第68号 | 2013-11-04 |
| 第69号 | 2014-02-04 |
| 第70号 | 2014-04-06 |
| 第71号 | 2014-06-30 |
| 第72号 | 2014-08-28 |
| 第73号 | 2014-10-10 |
| 第74号 | 2014-12-09 |
| 第75号 | 2015-02-28 |
| 第76号 | 2015-04-08 |
| 第77号 | 2015-06-20 |
| 第78号 | 2015-08-24 |
| 第79号 | 2015-12-11 |
| 第80号 | 2016-02-24 |
| 第81号 | 2016-04-10 |
| 第82号 | 2016-06-30 |
| 第83号 | 2016/8/26 |
| 第84号 | 2016/10/18 |
| 第85号 | 2016/12/10 |
| 第86号 | 2017-02-28 |
| 第87号 | 2017-04-19 |
| 第88号 | 2017-07-07 |
| 第89号 | 2017-09-05 |
| 第90号 | 2017-11-30 |
| 第91号 | 2018-03-22 |
| 第92号 | 2018-06-22 |
| 第93号 | 2018-08-10 |

24　研究成果報告フォーム　（会員専用ページ　＞　研究成果報告フォーム）

M-GTAを用いた ①著書刊行 および ②学位取得 をされた会員は、下記よりご報告ください。

会員による研究例として「会員による研究の紹介」に掲載いたします。

①著書報告 (報告用フォームURL)

②学位取得報告 (報告用フォームURL)

・・・・・以下、フォームの内容・・・・・

①著書報告

・会員氏名

・著者名

・著書名

・出版社

・刊行年

・email

②学位取得報告

・会員氏名 (日本語/英語)

・研究領域 (選択式)

・学術論文名 (日本語/英語)

・学位授与大学 (日本語/英語)

・取得学位 (日本語/英語) 例)博士(看護学)

・学位取得年月

・email